

教 仏 庵 草

第202号
(発行日)

2007年4月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日
午後3時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月第一と
第三木曜日午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

仏の願いはどこに

人間は肉体と精神、体と心から成り立っている。肉体だけの人もなければ心だけの人もいない。買い物にいくにしても体がかつてに出かけるのではない。心が買い物に行こうと決め、どういう道を通るか、何を買えばいいのかなど、どの店に行けばいいのかなどを心が考えるのである。体の行動の主は心である。肉体の行動も言葉も心が本になっ

て行っている。であれば私の生活、あるいは私の人生の主は心であるといっている。肉体と心のどちらが主であるかといえ、心が主といえる。何を欲し、何を選び、悩んだり楽しんだり、泣いたり笑ったり、幸福を感じたり不幸を感じたりするのも体ではなくて、心である。私の人生の主体は心である。私の人生を作り上げてきた一番の本は心であると言える。

ところが仏の救いを考えるのに、仏のお助けをとかく肉体の上で受け取ろうとしてし

まう。「食うに困らないように」「商売がうまくいきますように」とか「病気が治りますように」「悪い病気がかからないように」とか「災害や事故に遭いませぬように」「死ぬときにころっと死にますように」など、肉体の安全や健康を願い、それがかなうことが仏の救いのように思うことが多い。

けれども肉体が古い、病となり、死んでいくことは自然の道理である。どれほど食うに困らないような経済状態であつてもついには食うこともできなくなる。老病死は自然の道理であつて、馬も羊も虫も同じである。生まれたものは草木も、星々もすべて滅することは自然の法則である。私たちが凡夫が心配するのは私の肉体が古い、病となり、死ぬことであるが、仏様(アミダ)が心配されているのは、老いでも病いでも死でもない。身体を私自身と思ひこみ、それに深く執着して、悩み苦しみの絶えない迷い心(無明

煩惱)を心配されているのである。肉体を頼みにして老病死を頼み悩み、不安に思う心もつと云えば苦悩や不安の本になる迷いの心(無明)を問題にされ、それを案じておられるのである。私たち凡夫は肉体の上の心を心配し、仏様は私たちの心を心配しておられる。

親鸞聖人在世の頃、天災地変で多くの人が亡くなつていかれたことに対して、お手紙に「ごぞことし、老少男女おおくのひとびとのしにあいて候うらんことこそ、あわれにそうらえ」と同悲されながら、「ただし、生死無常のことわり、くわしく如来のときおかせおわしましてそうろううえは、おどろきおぼしめすべからずそうろう」と申されて、何も驚くべきことではないと仰せられている。

*

仏様が心配なさり聖人が案じられているのは、肉体の老病死を心配されているのではない、無明煩惱という迷い心だけで生き、この世の人生を終わっていくことを案じられているのである。無明(まよ

い)だけで生きるのを心配され早く弥陀の本願に帰すべしとお勧めなのである。もし無明煩惱だけだとこの世だけが苦しいのではない、この世での肉体の死の後もこの無明煩惱の心は相續し、それがまた形(身)をつかんで身を感じ、それに執着して苦を受けていかねばならないという、いわゆる生死流転を繰り返すことを心配されるからである。

亡くなるときは、家族からも友人からも、家や財産や土地からも離れ、自分の体からも別れていかねばならないが、主たる心(無明煩惱)だけは意識の連続体として相續していくと聖賢は申されている。

凡夫が肉体の上のことばかりを問題にしていることがすでに無明の表れである。その無明の迷い心を断ち切って、まことの清浄な仏たらしめたいのが仏の願いなのである。(了)



アーケド
(C)SHOGAKUKAN INC.

真宗問答(三十二)

第二十願その一

(第二十願文)

たとい我、仏を得んに、十方の衆生、我が名号を聞きて、念を我が国に係けて、もろもろの徳本を植えて、心を至し回向して我が国に生まれんと欲わんに、果遂せずんば、正覚を取らじ。

(現代語訳)

わたしが仏になるとき、すべての人々がわたしの名を聞いて、この国に思いをめぐらし、さまざまな功德の本である名号を称えることを積んで、心からその功德をもってわたしの国に生まれたいと願うなら、その願いをきつと果たしとげさせましょう。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

F 「十九願は、さまざまな善根を修して浄土に往生しようとする自力の者も見捨てず、真実の信心に誘い入れようとしたまう願で、これは真実の

信心へと導きたもう方便の願

と聖人は見られました。次に二十願ですが、これはどのような願ですか」

D 「これも阿弥陀仏の一切衆生を救いたいという慈悲より起こされた方便の願で、十八願の他力信心に入らしめたいとしてもうけられたお手だての願であるといわれています」

F 「なぜお手立てなのですか」

D 「それは、真実の願である第十八願の念仏往生の願が一切衆生を平等に救済したもう誓願ですが、この願を私たちが聞いてもなお自力の心があって、十八願の広大なお心に閉じられている、そういう人たちをなお見捨てず、他力の信心に入れしめようとされて建てられた願とお聞きします」

*

F 「第十八の念仏往生の願が真実の願で、この願を聞いても、その真意をただけない

というの、どういうことなのか」
D 「念仏往生の願は、法蔵菩薩が、衆生には浄土に生まれることが出来るような清浄真実

の心がないと見られ、それゆえ衆生が浄土に生まれる因をすべて法蔵菩薩の修行によって完成し、それでもって衆生

をまるまる摂取して助けようとするのです。そして私たちに「そのまままるまる助けろ」と仰せられる絶対救済の思し召しを私たちに知らせるために、へ乃至十念若不生者不取正覚——我が名を称えるばかりで浄土に往生せしめる」と私たちに誓われました。

F 「この念仏往生の願を聞いてもそのお心をただけないのですね」
D 「ええ、へ汝の心の有様に要はない。まるまる助ける」というお心を「我が名を称えるばかり必ず助ける」と仰せ下さったのです。それほど広大な大慈大悲ですが、そういう丸助けのお心を素直にいた

だかないのは、私たちの方がこのまま阿弥陀仏に全面的に引き受けていただかねばならないほどの破綻した人間であ

ることが知られていない。だからまだ何とかすれば自分は何とかなるといふ自己信頼いわば自分の力をたのむ・慢心があるから弥陀をたのまないのです」

F 「阿弥陀仏の丸助けの仰せを聞いても、その御慈悲が分からないのですね」

*

D 「ええ、それで「我が名を称えよ」との念仏往生の願を聞いて、どう受け取るかという、へ念仏を称えさえすればいい」へ称えていけばいいかは助かる」という風に受け取ってしまう。自分の能力を見限っていないときはそう受け取ってしまうのです。乃至十念若不生者不取正覚（我が名を称えるばかりで浄土に往生せしめる）とのお誓いは、助かる道がまったくなくなつて無窮の闇に落ちていくしかないような者にとつてはただ一つ残された、驚くべき救い

です。ですが、まだまだ自分は何とかなるといふ自分の能力を信じている人には、それが響かないのです」
F 「それだから「称えるばかりで阿弥陀様は助けてくださるのだ、じゃあお念仏を称えていけばよい」と受け取って

しまうのですね」

D 「ええそうです。法然聖人当時も、法然聖人から教えを聞いていてもそう受け取った人が多かったのです。お念仏を称えたら阿弥陀様は助けてくださるといふ風に受け取り、念仏を人間の側の行（修行）にしてしまう。意識的あるいは無意識的に」

F 「無意識的」といふのは「自分では「称えて助かる」と意識していなくても、事実はそうなってしまうのです」

F 「阿弥陀仏の本願をたのんでいない念仏は自ずから自力の念仏になってしまっているのですね」

D 「ええそうです。それは、称える念仏は他力であるが、称える心は自力ですから、他力の中の自力というのです」

*

F 「第十八願の念仏往生の思し召しを自力・慢の心ゆえ、大悲のお心が受け取れず、人間の側の修行のようにしてしまふ人はもう救いは無いのでしょうか」

D 「そこなんです。人間は・慢心が強いからいたいていは自力の心で念仏を受け取ってしまふことを阿弥陀仏はすでに

知っていてくださって、そういう者もどこまでも見捨てずに導きついには真実の信心へと帰入させてやろうとの誓いを建ててくださったのです。それが第二十願です。如来の大悲は非常に深いのです」

＊

F 「では二十願の願文を説明をしてください」

D 「まず十方衆生に喚びかけ、
〈我が名号を聞きて〉とあるのは念仏往生の名号のいわれを聞いてということでしょう。〈念を我が国に系けて〉とは日頃から浄土に生まれたことと浄土に思いをかけていくことです。そして〈もろもろの徳本を植えて〉といわれるのは、念仏往生の願を聞いても、善や功德の本である名号を〈称えて助かろう〉とし、この名号を植えるようにして称えることです。徳本というのはもろもろの功德（しあわせ）の本である阿弥陀仏の名号のことです」

F 「植えるように称えるとは」
D 「例えば米を得るために田んぼに苗を一株一株植えるように、未来に収穫（功德）を得ようとして、そのためにあらかじめ実践することです。未来に阿弥陀仏のお助けに預

かるために現在において念仏を称えていこうとすることです。称えた結果を将来に期待しながら称えていく姿です」

F 「へ心を至し回向して我が国に生まれんと欲わん」とは」

D 「まじめに浄土に生まれようと願って念仏を称えることです。浄土に生まれるために己の称える念仏の功德を心から浄土に振り向けようとすることです。自分の修する念仏の功績でもって浄土に生まれさせていただこうと励むことです。これは念仏を自分の行う修行のようにしているのです」

F 「ということは阿弥陀様の全面的な救いを信じられず、自分の側の行いを当てにし、それでもって阿弥陀仏に助けていただく縁にしようとするのですね」

D 「ええ、〈弥陀にたすけられるばかりである〉というところがいただけないからそうなるのです。ただし、こういう者をも見捨てず、ついには真実の信心にあずからしめたいという大悲がこの二十願です。その思し召しが〈果遂せずんば、正覚を取らじ〉とのお心です。このように自力で念仏する者も、ついには十

八願の真実信心の領域へと至ることを果たし遂げずにはおかない、そうできないようなら仏には成らないとの法蔵菩薩様のお誓いなのです」

＊

F 「十九願ではさまざま善根を積んで、それによつて浄土に生まれさせていただきたいと願う者にも阿弥陀仏の慈悲のお手立てが及んでいました。二十願にも阿弥陀仏の深い慈悲がこもっていますね。では十九願と二十願の違いを教えてください」

D 「十九願は人間の側からさまざまな善根や功德を行う者への誓いですが、十九願の道はいろいろな善や行を為して救いにあずかろうとして行く結果、善行も徳行もとても本当には出来ないという壁にぶつかってしまいます。だいたいわ真面目に善を行おうとするといかない自分が知られてきます。嘘をつくまいと努力すると嘘をついてしまう自分知られてきます。利己的な生き方を止めようところかけると返って自分の利己心の深さを知らされます。心を浄らかにしようとするとき自分の心のひどさが見えてきます。こうして人間性の限界に直面し

てきます。十九願は人間の本性の愚悪さを知らせてくださる願でもあります」

F 「親鸞聖人は若い頃比叡山で天台宗の修行僧として、戒律を守るとか仏教教理を研修するとか、禅定を修するとかして浄土に生まれる道を進まされた結果、いずれの行も及びがたき身であるという自己状況にぶつかられたのです。そうすると天台宗の修行は十九願の道であったといえますね」

D 「そうなんです。聖人は、そういういろいろな善き行を修しても、自分の力での修行によつては救いを見出せなかつたのです。そういう状態は決して特殊なことではなくて、古今東西、真面目に自分を高めたいとか、救われたいとか、真実に生きたいと願って生きようとするといつていいほど、こういう人間の限界にぶつかってしまうのではないのでしょうか。阿弥陀仏はそれをすでにみこして、こういう救いなき人間、そういう者に、すでに〈我が名を称えよ、助ける仕事は弥陀が全て引き受ける〉と喚びかけて下さっているのです」

＊

F 「この念仏往生の願を受け入れるのが十八願の真実信心とお聞きしてますが、二十願はどうなのでしょう」

D 「十九願の道にいきなり、念仏往生の願を聞いても、なお自分の知性や行いをたのむ心（自力の執心）にさえられて弥陀の本願を疑ってしまうのが凡夫なのです。それを阿弥陀仏はちゃんと知っておられ、念仏往生の願を聞いても〈それじゃあ、お念仏一つを称えさえすればいいのだ〉と形だけ受け取ってしまい、念仏を自分の側の行いとして励む者、念仏行で救いをつかもうとする者、そういう自力疑心の者もお捨てず、本願力にてやがておのずから真実信心に帰入せしめたいと誓われたのが二十願であるといわれています」

F 「念仏往生の願にであいながらも、なお大悲のお心をお願いだけに闇に留まらざるを得ない者を憐れんでくださって、真実信心の世界に道をつけてくださるという、本当に至れり尽くせりの思し召しですね」

D 「そうなんです」

（了）

信心夜話

①『香樹院講師語録』より

任すまじき事ただ一つあり。「其のまま我が心にまかせては、必ず必ず誤りあるべし」と、先徳はのたまえり。今日の我れ人は、生々世々、我が心に任せし故、迷いの凡夫とはなりしぞかし。

*

自分の心ほど自分を迷わすものはない。我が心は邪見・慢で、思うこと考えることすべてが迷いのきずとなる。たとえば自分の考えで「浄土があるかないか」はつきりしたい。しなければ信じない。「阿弥陀仏はあるかないか」分らない。だから信じられない」などという凡夫の考えにたぶらかされるのである。阿弥陀仏があるかないかどころか、自分の心さえ、それがどんなものであるかも、何が真実であるかも分からないのが私たち。そんなおのれの心で考えていることが間に合うように思い、自分の考えで助かる道を判断し、正邪を見定めて、助かりにかかろうとする。それをここでは「そのまま我が心にまかせては必ず誤りあるべし」と云われるのでありましょう。

歎異抄第二章でも、聖人に対して関東から尋ねに来られた方々の質問は「お念仏は本当に浄土に生まれさせていただけの行なのですか。それがはつきりしませ

ん。どうしてこの南無阿弥陀仏が浄土に生まれる因なのかをお聞かせ下さい」というような質問を聖人になさったのであろう。質問者たちは、お念仏が浄土へ生まれる行（因）であることをはつきりと確かめたかったのであり、確かにそうかどうかをなげければこそ安心であり、救いであると思っていたのではなからうか。

それは、浄土往生の確かめを自分の心でできると思っているからである。自分の心を途方もなく買いかぶっているのである。

私たちが聞法する者も、しつかり聞いていけばいつかは「念仏でなぜ助かるかが分かる 때가来るだろう」と思って聞いている。しかし、いつまでたってもそんな時はこない。当てだけである。聞けば自分の心で分かると思つて、自分の心を当てにし、信頼し、自分の心に任せてきたが、「我が心に任せし故、迷いの凡夫とはなりし」の仰せ通りのありさまである。

*

聖人はお弟子方に「親鸞においては）念仏は、まことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また、地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもつて存知せざるなり」とズバリおっしゃった。「念仏が浄土に生まれる因か、それとも地獄に墮ちる業か、私は全く知りません」と聖人は申される。それは「ただ念仏申すばかりで必ず浄土に生まれさせよう」との阿弥陀仏の不可思議なお誓いをただ単純に信じて念仏申しているだけで、

そのほかには何もないのである。それだけで私は大満足であるとの聖人の思し召しでありましょう。

この南無阿弥陀仏で「必ず生まれさせる」という仏の御約束、仏の大悲を聞いているだけ。私がどう思うか、どう考えるか、どう了解するか、そんなものには全く要がない。私の考えはこの娑婆の事に役立てていけばいいのであって、浄土に生まれる道については赤子同然、西も東も分からぬ心である。そんな赤子のよいうな私（の心）は、大悲の親が「連れていく」「助ける」と仰せ下さる大悲の言葉（お心）をたのむばかりであつて、それで大満足なのである。

②『香樹院講師語録』より

秀存講師、尋ね申して曰く。信には疑いなくても、それでも心持の悪い時がありますか、そんな時は、いかが致せばよろしきにや。

師の仰せに。そんな事は他に云わいでもよい。ただ御念仏をしていらつしやれのう。

*

一蓮院秀存師は真宗大谷派の明師として有名な方である。師がことに有難いのは自分の正直な心を打ち明けてくださり、そこに真宗の教えを聞いていかれた点である。

ここでは真宗に帰依し本願を信じていますが、どうも心持の悪い時があります、どうしたらよろしいかと、先輩の香

樹院師に尋ねておられる。

真宗の實際生活は喜びばかりが続くのではない。何ともない日常が多く、それほどばかりか心持が悪い場合もあるのである。もやもやとかいらいらとか、体の心配とか、死ぬのではなからうかという不安など、そういう心が起こるのである。

生涯、煩惱具足であり煩惱熾盛の生活が続く。悲しいことである。

真宗のお説教などでは「真宗の生活は仏法を喜ぶ生活」と語られるが、喜びはあるけれども、喜びは乏しい。それこそ煩惱妄念がなくならないのである。悩みや不安やもやもやなどが起こるのである。

「心持の悪い時」というのはこういう時であろう。それに対して、香樹院師は「そんなことは人にいわんでもよい。ただお念仏をしていなさい」とのみ答えられた。すなわち「そんなことではダメ」とも仰せられず、「もつと聞法をしていけばいい」との仰せである。煩惱妄念は往生の障りにはならない。ただ煩惱が盛んなるときは気分がすぐれない。いやな気持ちになる。何とかしたいと思う。しかし何ともならぬ。それを見越しての香樹院師の仰せは「家でただ念仏しておれ」と。

歎異抄第九章に「他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」で、他力の悲願すなわち念仏は、かくの如きの我等がために仕上がっているから、その心持の悪いまま、どこにも尋ねに行か

ずとも、あるいはその心持ちを何とか処理しようと思わずとも、ただお念仏をしておればいいとのことである。無理に喜ぼうともせず、無理に悪い心持ちを無くそうともせず、そのままお念仏を申すばかり、聞くばかりである。

すると不思議にも「その心だから、私がついている、助ける」との大悲が流れてくださるのである。無理に喜ぼうとせず、ただ念仏申しているばかりのところ、にむこうより与えられる喜びである。

我が心は自分でどうにもならないけど、お念仏申していることは我が心に手をかけずにいることになっているのである。

(丁)